

ピース・ウイング長崎 会報

へんりゃ

115号

■財団法人長崎平和推進協会 〒852-8117 長崎市平野町7番8号 ■電話(095)844-9922 FAX(095)844-9961  
<http://www.peace-wing-n.or.jp>

■アジア青年平和交流事業報告

■理事長声明

■ゲルニカ原爆展における被爆体験講話

■平和宣言

■お知らせ



「アジア青年平和交流事業」参加の日本人青年は、この大勢の子ども達と一緒に鶴を折り、日本語・マレー語・英語の3ヶ国語で「ふるさと」を歌い、最後は「ドラえもののうた」を披露し、子ども達の大歓声を浴びました。  
(8月29日、クアラルンプール市内の小学校)



今回で5回目となる「アジア青年平和交流事業」は、昨年はじめて訪れたマレーシアのマラヤ大学に加え、シンガポール大学を訪問して交流会を開催しました。両大学の学生はとも向学心旺盛で、日本人青年も、負けじとたいへん積極的にプレゼンテーションや交流会に臨みました。参加した日本人青年が、それぞれの思いを寄せてくれましたのでこの欄で紹介します。

## 「アジア平和交流に 参加して」

長崎市民FM放送理事

月川 昌則

私がこの事業に参加して、最も強く

心に残った事は、「戦争と平和の間にあるもの」です。このフレーズは、私がホームステイさせてもらった、マレーシアを代表する彫刻家の方が、作品の解説中に使っていたものです。

私が事業に参加した目的のひとつに、「戦争と平和は反意語ではない」という言葉の真意を知るためのヒントを探す、というのがありました。それが私の平和活動のキーワードであり、テーマでした。反意語でないはずの言葉の中にあるもの…ふたつの「間」にあるものとはいいたい何なのでしよう。

私は、「間」を知るキーワードとして、「経済が豊かでない

# 和 交 流 事 業

と平和ではない」という両国の学生の言葉と、「戦争をビジネスとしている人がいる」という事実を挙げます。

この2点の共通点は「お金」です。今、世界の中では「豊かな国」お金を持っている国」という判断基準になっています（伸び代が多く、成長段階であるシンガポール、マレーシアの両国は「お金持ちになる可能性がある国」という位置付けかもしれませ

ん）。「大国」と呼ばれている国の経済の一部を支えているものの中には、「武器」の開発と売買があります。その「戦争ビジネス」で企業と国家に膨大な利益をもたらしているのも周知の事実です。戦争がなくならない要因にはこのような現実もあるのではないのでしょうか。被爆地に生まれた人間してみれば、とんでもない矛盾です。

「お金が無くても豊かに暮らせる」…何かの歌詞のようですが、こんな世の中になれ

ば戦争はなくなるのかも知れませんが、平和交流ももちろんですが、たくさんを学ぶこと（特に自分に足りないものを見つめ直すこと）ができ、すばらしい経験をさせていただきました。

## 「両国の内面部分を 理解して交流を」

長崎大学2年

寺崎 るい

私は高校三年間、ある平和活動に参加し、その活動の一環でフィリピンを訪問したことがあります。

研修を積んで訪問したつもりでしたが、実際には現地に行かなければ見えないものが沢山ありました。今回もその事を強く感じました。

私は、両国の学生との交流の中で、特に印象深く感じたことがありました。それはマレーシアのマラヤ大学の学生とのデイスカッションでのことでした。交流をした学生は日本文化を専攻しており、日本の政治や経済などについて大変精通し、「日本の文化と

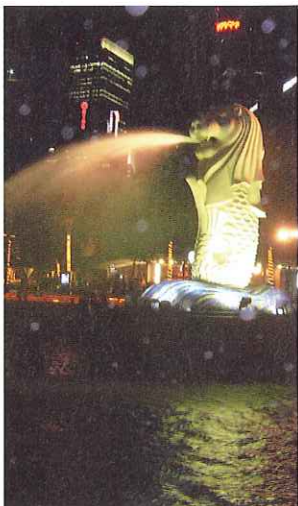
かすごく好きで、将来は日本に住みたいと思っています。」と答えてくれました。

私は、それを聞いて大変嬉しくなりました。しかし、ある人が「じゃあ日本のサブカルチャーに興味がなかったとし

ても日本を好きになっていったと思いませんか？」と質問すると、その学生は返答に困っていました。過去の加害の事実を考えると、その学生はサブカルチャーなしには、「日本を好き。」と声を大にして言えなかったのかもしれない。私はそう考えると大変複雑な気持ちになりました。確かにサブカルチャーはその国の中核をなすものであり重要です。しかし、国と国との交流を考える時大事なものは、表面部分だけではなく、歴史や文化の内面部分を理解した上で互いを受け入れて交流していくことが大切だと思います。私が今回の平和交流事業を通じて一番に重要だと感じたのはこのことでした。

そして、両国における、日本の加害の歴史を学び、尊い平和をこれからも守り続けなければならないなどと強く感じました。

私は国際交流に大変興味があるので、これからも様々な国を訪問してみようと思っています。その際には今回の平和交流事業から学んだことを生かして、相互理解を深めていけたらいいと思います。



シンガポールの顔「マーライオン」



## 「未来を担う」 世代の対話を」

立命館アジア太平洋大学1年

佐々野 桜

「日本人は事実を知らない。」  
一緒に住んでいるシンガポール  
人が私に言った言葉で、私は今で  
もこの言葉が忘れられない。

シンガポールに到着後、すぐに  
チャンギ刑務所博物館へと向かっ  
た。いくつもの展示物の中でとり  
わけ目を引いたのが、遺族がキル  
トに綴った家族や平和に対する思  
いであった。

「Hope peace eternal in  
the human breast」

私は、この言葉が全てを語って  
いるように思え、胸が締め付けられ  
たのを今でも忘れることができない。戦  
後62年経った今、私たち若い世代は、  
未来へ向けてどのようなメッセージを  
発信していくことができるのか。自問  
自答しながら、次の目的地へと向かっ  
た。

マラヤ大学では、今回の交流事業で  
もっとも印象に残った出来事があった。  
ディスカッションが始まるとすぐに学  
生たちは、身を乗り出すようにして、  
第二次世界大戦や日米関係・北朝鮮の  
核ミサイルについてどう思っているの  
かなど、矢継ぎ早に聞いてきた。

# 平 年 青 ア ジ ア



「日本占領時期死難人民記念碑」前にて

での使命であると考えている。その  
ためにも、私たち若い世代の交流が  
盛んになり、民間レベルで何ができ  
るかを考えていくことはとても大切なこ  
とだろう。

「我、太平洋の架け橋とならん。」  
かつて、新渡戸稲造氏が言ったこの  
言葉のような人になりたいと私は、考  
えている。

## 「身近になった 私の中の平和」

大学非常勤講師

松本 一見

マレー語の「tak kenal maka tak  
cinta」という諺があります。これは日  
本語で「お互いによく知らない」と、愛  
し合うことができない」という意味で  
す。今回私は、「アジア青年平和交流  
事業」に参加し、「知る」ことの大切  
さを確認しました。

今年度の平和交流事業では、シンガ  
ポールとマレーシアの2ヶ国を訪問し、  
日本軍占領時の戦跡巡りやホームステ  
イ、小学校訪問、そして現地の大学生  
達とお互いの文化や平和についてディ  
スカッションなどを行いました。その  
中でも、特に印象に残ったのは現地大  
学生との交流です。先述の「tak kenal  
maka tak cinta」という言葉は、マラ  
ヤ大学でのディスカッションで「平和

のために大切なことは何か」と質問を  
した時、マレーシアの学生が教えてく  
れたものです。両国の大学生はアジア  
や世界の情勢に非常に詳しく、日本の  
外交問題になっっている靖国神社の参拝  
問題や、憲法9条などについても質問  
を受け、現地大学生の「様々なことを  
知ろう」という意識が高いことに驚き、  
また刺激を受けました。

私は長崎に生まれ育ちながら、原  
爆や戦争について知ろうとせず、目  
をそらし続けてきました。何事も事  
実を知ろうとしなければ、そこにあ  
る問題は問題のまま解決されないよ  
うに、これまでの私にとって「平  
和」とはとても難しく大きな問題で  
した。しかし、このプログラムの事  
前研修の間に様々なことを考え、他  
の参加者や関係者の方々から多くの  
ことを学び、私の中で平和への取り  
組みが少し身近なものになりました  
。さらに今回シンガポールとマ  
レーシアの人達の考えを直接聞くこ  
とができ、より深く知り合うために  
はやはり、顔と顔を合わせて交流す  
ることが大切であり、それが平和へ  
の第一歩になるのだと実感しまし  
た。

6日間という短い時間でしたが、  
本当にすばらしい経験をさせていた  
だきました。今後この経験を生かし、  
より多くの人が平和について考え、  
様々なことを「知る」きっかけ作り  
を行っていきたいと思います。



## 「現地で触れ合い 多面的に考える」

長崎大学2年

中野 華子

日本出発前まで、私たち5人は現地でのプレゼンの準備に追われていました。短い発表時間の中で、私たちはマレーシア・シンガポールの人たちに何を伝えたいのか。何を伝えられるのか。そもそも平和とは何なのだろう。何度も何度も話し合いを繰り返しました。「核兵器がない世界、戦争がない世界」平和な世界」果たしてそう言えるのか。それが私たちの抱いた疑問でした。

シンガポールでは現地の大学生と共に



フェアウェルパーティに向かう前の日本人青年(ザインール先生宅玄関)

に、戦跡めぐりをしました。日本は第二次世界大戦で負け、被害者意識を強く持っています。太平洋戦争中、東南アジア諸国に対して行った侵攻の事実に対してあまり目を向けていないように思います。博物館や戦跡からは当時の日本軍が行った数々の非人道的な行為の跡をまざまざと見せ付けられました。訪問先で見つけた長崎・広島の原因被害データは私たちが知る物とは大きく異なり、犠牲者の数も非常に少なく書かれていたことにはショックを受けました。ひとつの戦争に対しても、それぞれの国でそれぞれの解釈があるので改めて感じました。

マレーシアでは小学校を訪問し、折り紙や日本の歌を披露しました。初めてみる日本人に、子供たちは興味津々の様子でした。また一泊だけでしたが、ホームステイできたこともマレーシア特に普段私たちがあまり接することのないムスリムの生活に触れることができ、非常によい経験となりました。マレーシア大学の学生は非常に学習意欲が高く、私自身強く刺激を受けました。

日本国内で戦争や原爆、核兵器、平和について学び考えることは非常に大切です。ただ、国外に出て、現地の人々に触れ合うことで多面的に考え、新たな見解が生まれることもあると思います。「平和な世界」それは人と人が触れ合うことで少しずつ構築できるものだと改めて感じました。6日間を共に過ごしたメンバーそして、この事業を通して知り合えた方々から多くの刺激を受け、これを自分の糧として今後のステップにしていきたいと思っています。



マラヤ大学では熱の入ったプレゼンテーションとなりました。

### 理事長声明

財団法人長崎平和推進協会は、被爆者をはじめ市民や各種団体など広範な人々が集まり、個々が持つ思想や政治信条の違いを乗り越え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を目標に活動しています。

特に、当協会が実施している年間約1,000回にのぼる被爆体験講話は、被爆者の筆舌に尽くしがたい体験を伝えることで、人類に二度とこのような体験をさせてはならないことを訴えています。

今回、現職の防衛大臣が米国による原爆投下を容認するかのような発言をされたことは、原爆死没者や長年原爆後障害で苦しんでいる被爆者を冒とくするものであり、当協会としては到底容認できるものではありません。

核兵器は一般市民を無差別に殺戮する非人道兵器の最たるものであり、いかなる理由があってもその使用は絶対に許されないことを、日本国民をはじめ世界の人々に認識してほしいと思います。

平成19年7月3日

財団法人長崎平和推進協会 理事長 横瀬 昭幸

千葉県にある麗澤大学比較文明文化研究センターでの講演会における、久間防衛大臣(当時)の発言に対し、7月3日理事長声明文を発表しました。翌日発行の「情報Box」83号上において掲載しましたが、本紙においても会員の皆様にお知らせいたします。



# 祈念館だより

今年で三回目となる国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館主催の海外原爆展は、平成十九年六月二十七日から九月九日まで、スペイン・ゲルニカ・ルモ市の平和博物館で開催されました。広島、長崎の原爆被災資料展示や弾き語りによる朗読会のほか、継承部会員の下平作江さんによる被爆体験講話も行われました。



記者発表に臨む下平さんとスタッフ(ビルバオにて)

## ゲルニカ原爆展における

### 被爆体験講話

継承部会員 下平 作江

今回、海外原爆展が開催されたゲルニカ（人口約一万六千人）は、スペイン内戦中、人類で初めて本格的な無差別爆撃を受けてから今年で七十周年を迎えました。

無差別爆撃の惨状を描いたピカソの名画でも有名なこのゲルニカは、空爆で町の大部分は破壊され、当時の人口約七千人のうち死者数は千六百人といわれており、犠牲者のほとんどが長崎の原爆投下時と同様に、一般市民であったということです。

この原爆展の開催に併せ、ゲルニカ、ビルバオ、サンセバスチャンの各都市において被爆体験講話を実施する機会に恵まれました。

現地の方々は、長崎、広島への原爆投下を知らない方が多く驚いたと同時に、まずは知ることから始めてほしいと感じました。

初日の開会式会場では、在スペイン日本国大使、ゲルニカ市長を

はじめとした多くの方々から私の話に耳を傾けてくださり、被爆の実に相に触れ、原子爆弾が私たちや私たち家族に与えた被害の残酷を痛感して涙を流してくださいました。

これは、戦争の愚かさや核兵器が如何に非人道的であるかを、講話を聴かれた多くの方々を受けとめてくださった証だと感じています。

また、ゲルニカ無差別爆撃の生存者であるルイスさんともお会いし、「核兵器は二度と使ってはいけない。ただちに廃止すべきである」との想いを共感することができました。

その後すぐに、ルイスさんはこの内容の書簡を核保有国の各大統領あてに送付されたそうです。

この方にお会いしたことで、世界各国が手を取り合って平和な世界を築いていきたいという私の想いが、尚一層高まりました。

その後、現地の報



多くの市民で盛況となった、下平さんの講話会場(ビルバオにて)

道機関等を通じて、ゲルニカ平和博物館の来館者が原爆展開幕以来、劇的に増加しているとの朗報を耳にしました。

今回の原爆展における被爆体験講話を通し、国を越えて人々の心を動かすという大きな成果を得ることができました。

被爆地長崎から世界へ、核兵器廃絶の日へ向けて一歩ずつ、確実に進んでいきたいと思えます。



# 平和宣言

Peace Declaration

長崎市長 田上富久

「この子どもたちに何の罪があるのでしょうか」

原子爆弾の炎で黒焦げになった少年の写真を掲げ、12年前、就任まもない伊藤一長前長崎市長は、国際司法裁判所で訴えました。本年4月、その伊藤前市長が暴漢の凶弾にたおれました。「核兵器と人類は共存できない」と、被爆者とともに訴えてきた前市長の核兵器廃絶の願いを、私たちは受け継いでいきます。

1945年8月9日、午前11時2分、米軍爆撃機から投下された1発の原子爆弾が、地上500メートルで炸裂しました。

猛烈な熱線や爆風、大量の放射線。

7万4千人の生命が奪われ、7万5千人の方々が深い傷を負い、廃墟となった大地も、川も、亡骸で埋まりました。平和公園の丘に建つ納骨堂には、9千もの名も知れない遺骨が、今なお、ひっそりと眠っています。

「核兵器による威嚇と使用は一般的に国際法に違反する」という、1996年の国際司法裁判所の勧告的意見は、人類への大いなる警鐘でした。2000年の核不拡散条約（NPT）再検討会議では、核保有国は、全面的核廃絶を明確に約束したはずです。

しかしながら、核軍縮は進まないばかりか、核不拡散体制そのものが崩壊の危機に直面しています。米国、ロシア、英国、フランス、中国の核保有5ヶ国に加え、インド、パキスタン、北朝鮮も自国を守ることを口実に、新たに核兵器を保有しました。中東では、事実上の核保有国と見なされているイスラエルや、イランの核開発疑惑も、核不拡散体制をゆるがしています。

新たな核保有国の出現は、核兵器使用の危険性を一層高め、核関連技術が流出の危険にさらされています。米国による核兵器の更新計画は、核軍拡競争を再びまねく恐れがあります。

米国をはじめとして、すべての核保有国は、核の不拡散を主張するだけでなく、まず自らが保有する核兵器の廃絶に誠実に取り組んでいくべきです。科学者や技術者が核開発への協力を拒むことも、核兵器廃絶への大きな力となるはずです。

日本政府は、被爆国の政府として、日本国憲法の平和と不戦の理念にもとづき、国際社会において、核兵器廃絶に向けて、強いリーダーシップを発揮してください。

すでに非核兵器地帯となっているカザフスタンなどの中央アジア諸国や、モンゴルに連なる「北東アジア非核兵器地帯構想」の実現を目指すとともに、北朝鮮の核廃棄に向けて、6か国協議の場で粘り強い努力を続けてください。

今日、被爆国のわが国においてさえも、原爆投下への誤った認識や核兵器保有の可能性が語られるなか、単に非核三原則を国是とするだけではなく、その法制化こそが必要です。

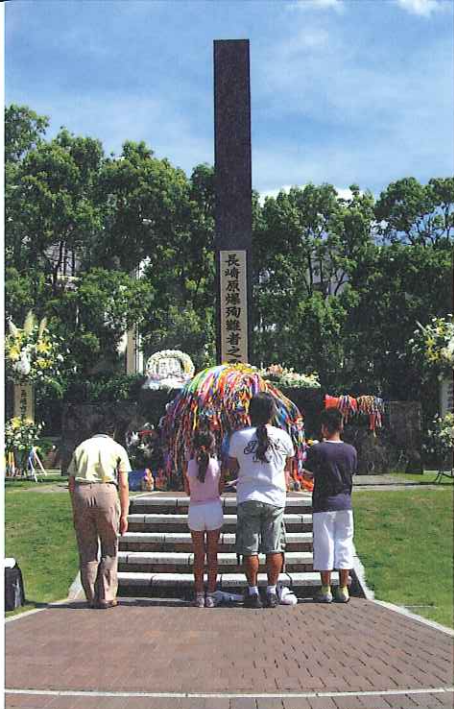
長年にわたり放射線障害や心の不安に苦しんでいる国内外の被爆者の実情に目を向け、援護施策のさらなる充実にも早急に取り組んでください。被爆者の体験を核兵器廃絶の原点として、その非人道性と残虐性を世界に伝え、核兵器の使用はいかなる理由があっても許されないことを訴えてください。

爆心地に近い山王神社では、2本のクスノキが緑の枝葉を大きく空にひろげています。62年前、この2本の木も黒焦げの無惨な姿を原子野にさらしていました。それでもクスノキはよみがえりました。被爆2世となるその苗は、平和を願う子どもたちの手で配られ、今、全国の学校やまちで、すくすくと育っています。時が経ち、世代が代わろうとも、たとえ逆風が吹き荒れようとも、私たちは核兵器のない未来を、決して諦めません。

被爆62周年の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典にあたり、原子爆弾の犠牲になられた方々の御霊の平安をお祈りし、広島市とともに、核兵器の廃絶と恒久平和の実現に力を尽くしていくことを宣言します。

2007年（平成19年）8月9日





62年目の暑い夏…  
祈念式典会場とその周辺では、犠牲者の冥福を  
祈り平和を願う様々な行事が行われました



写真の一部は長崎市広報課提供



シュバイツァー博士の「核実験禁止アピール」50周年記念コンサート

# ピアノと弦楽四重奏演奏会

シュヴァイツァー博士の孫娘クリスティアーネ・エンゲルのピアノと  
プラハ・スターン弦楽四重奏団の共演

日時 2007年(平成19年)11月21日(水) 午後6時30分(開場・同6時)  
会場 NBCビデオホール(長崎市上町1-35)  
入場料 大人 当日2,800円(前売り2,500円)  
学生 当日1,800円(前売り1,500円)  
全自由席:250席  
主催 IPPNW(核戦争防止国際医師会議)長崎県支部  
共催 長崎大学医学部創立150周年記念事業  
アルバートシュヴァイツァー世界医学アカデミーセンター日本事務局  
後援 長崎市、(財)長崎平和推進協会、IPPNW日本支部  
連絡先 三根真理子 ☎095-849-7127(長崎大学医学部・原研)

## 秋月グラント助成事業報告

長崎・セントポール姉妹都市委員会は8月6日から8月14日にかけて長崎市の姉妹都市である米国ミネソタ州セントポール市に長崎純心女子学園の生徒を中心とした訪問団を派遣しました。

8月9日にはセントポール市では初めてとなる平和祈念式典を開催し、「千羽鶴」の合唱、「あの夏の日」の朗読、長崎市長や長崎市民のメッセージを披露し、現地時間の11時2分にあわせて原爆犠牲者に黙祷を捧げました。

ほかにも訪問団は市長表敬訪問や修道院訪問、市民との交流などを通じて平和への祈りと長崎の心を届けました。

### 会員数報告

維持会員	1,325名
賛助会員	158名
学生会員	5名
合計	1,488名

平成十九年八月三十一日現在

### ご寄附ありがとうございました

6月から9月12日現在の寄附者です。

匿名 (六千円)

匿名 長崎中央ロータリークラブ (二万三千円)

匿名 (二万七千七百三円)

古瀬 ハツ (五千円)

匿名 (千円)

匿名 (敬称略)

